

た。

21:00 排泄介助

よく動いたせいか、排便も多量に出ました。このところ薬の力を借りずに排便できうれしいです。

21:30 着替え・投薬

まだまだ寝ないぞと言う顔をしていましたが、やはり投薬を終えるとすぐ睡魔が襲ってきたようです。

2003.12.14(日)

7:00 起床・排泄介助

今日は兄も朝までぐっすり、みんなでゆっくり起きました。父と母で焦りつつ、いつものようにトイレへ。セーフでした。

7:20~9:00 栄養注入・吸引・吸入

急ぎ注入をセットしたあとは、お腹をすかした兄の朝食の支度です。

父は兄の着替え介助、布団の片付けなどいつもの朝以上にお仕事満載です。兄が父に促されて着替えしている様子をニヤニヤしながらベッドから高みの見物している本人です。父と兄の食事が終了すると、父に吸入をバトンタッチして母はゆっくり朝食。忙しい朝ですが家族4人が元気に過ごすこんな朝が母は幸せです。

10:30 兄と一緒にテレビ

今朝はとても元気で、ベッドから降り自分で座位で兄のところまで移動して一緒に競馬を見ています。兄は乳児のころから父に連れられて競馬観戦に出かけていたせいで、休日の最大の楽しみが競馬放送のテレビを見ることです。本当にノリノリで楽しんでいるので本人も最近そばにいて一緒に見ることも多くなりました。最重度の障害者が趣味を持つことはとても困難ですが、兄のこの趣味(笑い)は父の兄への最大のプレゼントです。昔はあきれていましたが・・・本人は残念ながら兄ほどは集中できず、あれこれ興味が移ります。この性格は母似かもしれません。

11:30 排泄介助

父の介助で無事済ませました。

12:00~13:30 栄養注入

よく遊んだせいで、ベッドに入ったとたんウトウトし始めました。

お陰でお昼の支度はスムーズに進み、兄の好物のお好み焼きを珍しく母も冷めずに一緒に食べることができました。まだ寝ています。

14:30 排泄介助

父がいると排泄はかなりマメに行います。父だと不思議に時間の間隔が短くても出るんです。

15:30~16:00 座位で移動しながら遊ぶ

この時間になると、元気なときはそろそろ兄のグループホームへ送迎に同行するつもりになるらしく、父や母の動きを気にしながらあちこちついて回っています。

16:30~ 疲れてベッドへ・排泄介助・兄送迎に同行

気持ちとは裏腹に身体のほうは疲れてしまいベッドで又ウトウトしています。

父に「出かけるよ」と声をかけられたとたん、目がぱちりと開きました。

すっかり出かける気のなったようです。但し、出掛ける前の排泄介助は頑として拒否。こういうときは自己主張すごいです。さすがの父もあきらめて車へ。大喜びで身体をゆすっています。

18：00 帰宅・排泄介助

気が済んだのか、すぐのトイレも素直に成功。

18：30～19：30 栄養注入

すっかり疲れて、もう自分から寝る準備。注入と同時に熟睡です。

21：00 排泄介助・着替え

まだ眠そうなので、着替えしてそのまま又ベッドへ。

21：30 投薬

ぐっすり眠ったまま今日も投薬をして終了です。

表1 DAさんが利用している生活支援サービス

時刻	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜	土曜	日曜
09:30	(送迎)	定期診療	居宅支援 身体介護	(送迎)	居宅支援 身体介護	訪問看護	
10:00	施設支援 デイサー ビス			施設支援 デイサー ビス			
12:30			(事業者交 代)	(事業者交 代)			
15:30	(送迎)		居宅支援 身体介護	居宅支援 身体介護			
16:00				(送迎)			

デイサービス：1ヶ月あたり15.0日、給食加算15.0日、入浴加算15.0日

身体介護：1ヶ月あたり80.0時間、1回3時間

ショートステイ：1ヶ月あたり7日

表2 DAさんの一日の詳細記録

2月28日(土)			
時間	介護者	介護項目	所要時間(分)
5:00	母	兄トイレ介助	
30	母	見守り	120
6:00			
15			
30			
45			
7:00	父・母	DA(本人)トイレ介助	10
15	母	朝食支度、DA吸引	10
30	父・母	父：布団片付け 母：朝食支度、兄見守り	30
45	父・母	父：兄身支度介助 母：注入準備	10
8:00	父・母	父：兄食事介助、投薬管理 母：DA注入	30
15	父・母	父：DA吸入 母：兄トイレ介助	10
30	母	DA吸引	10
45	母	DA見守りながら洗濯、後片付け	30
9:00	父・母	父：兄見守り 母：入浴準備	
15	父・母	DA注入漏れ異常で緊急で病院へ行く準備	20
30	訪問看護師・	DAの定期訪問、胃ろうチェック、北部病へ 連絡、途中まで一緒に行く。	20
45	父・母		
10:00	父・母	父：兄見守り 母：DA消化器センター外来	30

15			
30			
45			
11:00		検査、診察など	165
15	母		
30			
45			
12:00		父：昼食支度、兄食事介助、投薬、片付け	45
15			
30			
45		父：兄見守り、トイレ介助	10
13:00			
15			
30			
45			
14:00	父・母	父：DAを玄関まで迎え 母：トイレ介助	20
15	母	母：DA注入開始、見守り	60
30			
45			
15:00	母	母：DA注入異常、北部病院救急へ連絡	10
15	父・母	DA便失禁で介助	30
30			
45			
16:00	父・母	父：兄見守り 母：DAと北部病院へ、DA介助	150
15			
30			
45			
17:00	父・母	父：DA玄関まで迎え、トイレ介助 母：便失禁の後始末、吸引	20
15			
30			
45			
18:00	父・母	父：兄トイレ介助 母：夕飯の支度、吸引	15
15			
30			
45			
19:00	父・母	父：兄夕食介助、投薬管理 母：DA注入開始	30
15	父・母	DA注入途中で便失禁、父母で後始末	30
30	母	DA注入再開、見守り、吸入、吸引	40
45			

20:00	母	DA注入終了、後始末、吸引	10
15			
30	父・母	DAトイレ介助、清拭	20
45			
21:00	母	DA就寝前の吸引	10
15			
30	父・母	母：兄入浴介助	30
45		父：就寝準備、兄のトイレ介助	
22:00	母	DA吸引、投薬	10
15			
30			
45			
23:00	母	母：兄のテレビ鑑賞を見守り、程よい所で就寝を促す	120
15			
30			
45		兄ようやく納得して就寝	

#### 5-5 DAさんの生活記録を通じた考察

##### (1) 医療的管理とサービス提供機関との連携

常時医療的なケアが必要な障害者の場合、健康状態に速やかに気づける援助者のいるサービス提供機関が家族の安心材料につながる。本市はデイサービスに看護師が配属されていることから、DAさんとその家族にとって生活の質的な保障を最低限満たしているといえる。支援費制度の居宅サービスとして掲げられているホームヘルプ、デイサービス、ショートステイは、いずれも医療的ケアを想定していない。しかし、現実には重度あるいは重複障害のある人たちの地域生活を考えた場合に、この医療的ケアを抜きにして語れない。

また、デイサービスに通うために利用する車の状態、運転者や介護者の動きも、本人、家族にとって何よりも精神的な安定と関係するだろう。現実には、職員の勤務体制は必ずしも十分ではなく、その意味では、リスクを背負っていると言える。

さらには、デイサービスのメニューにおいても、本人の興味関心に沿ったプログラムが作成され、日々の変化にフレキシブルに対応されており、また、家族との連絡もとれている。そして、実際にサービス利用しながら、本人・家族の体力や生活の質を考えながら組み立て直していける体制が望ましい。

##### (2) 日常生活の援助

本事例の場合、トイレ介助は大切な日課のひとつとなっている。むしろ、一日のかなりの時間を占めてしまう生活介護である。失禁があると着替え、シーツ・カバー交換、洗濯と一連の大きな介助が続くことになるが、本生活記録においては生活の中で自然に入り込んでいる。これらの援助はかなり必要と思われるが、身体介護、家事援助利用量は必ずしも多くはない。

### (3) かかりつけ医の存在

絶えず医療的なチェックを必要としているので、定期通院が重要になる。また、突発的な体調不良、例えば調査期間中の出来事として発熱があり、その後の母親の対応は適切なものである。それは、発熱とともに連絡ルートがしっかりと整えられており、速やかな対応がなされていることによる。そして、往診の体制もできていることが、在宅での生活を安定したものにしていくと言える。重心にとってかかりつけ医はなくてはならない存在と言える。その点でも、本事例はうまく体制が整えられている。

やむを得ず紙おむつを使用するので、その場合の配慮なども心得ている母親であり、こうしたすみやかな対応が家族の自然な支えと言える。日々の細かな事柄を、重心に関わるヘルパーがどれだけ習得するか、課題と言えそうである。

### (4) 重度の重複障害への対応

重度の重複障害児・者をもつ家族は、夜間時に気が休まらない生活がずっと続いていて、それが当たり前のようになっていくが、そのフォローは必ず必要である。

ヘルパー業務の範囲をどのように区切るかが、時折議論となるが、本事例の場合は胃ろうへの栄養注入を頼めるので、母親の外出が保障されている。ヘルパーの経験、専門性についての検討が必要である。

ヘルパー派遣の事業者の連携、ヘルパー同士の連携、それらをうまくつなぐ家族の役割などが機能して、円滑な生活の支えができることになる。これらは支援費制度の表面的なものではなく、質的なものが問われる。ヘルパーの質とは、本人と家族の安心を保障し、生活力を側面的に支えるものでもある。

### (5) 家族の身体介護負担

事例ではトータルにみて母親が割く時間は圧倒的に多いが、父親の排泄への関わりなど協力的な対応が母親の精神的な安定につながる。しかし、長期的にみた場合に現状の家族対応で十分かどうかは、もう少し長期的、客観的にみていく必要があるかもしれない。

### (6) 医療・福祉関連用品の開発

「医療用のテープやガーゼなどすぐ使い切ってしまう。もう少し動いても大丈夫な用具ができたと思う。居宅での介護は手が足りないことが多く本人にも家族にも使いやすい器具がもっと開発されてほしいというのが実感」という母親の弁は、医療関係用品、福祉用具などは必ずしも利用者にとって適当ではないことを示唆しているとも言える。こうした日々の細かな家族の意見をどう取り入れるようにしていくべきか検討する必要がある。

### (7) ピア・ヘルパーの課題

最近では、障害を同じくするヘルパーによる活動も実践されているが、ヘルパー自身のストレスのコントロールが困難になる場合もあるし、受け入れる場合の抵抗感もなくはない。本事例でのそのようなことが報告されており、ヘルパーがピアな関係である場合の難しさが表れている。同じ立場で理解しているということも言えるが、対応の仕方などは個々に異なり、また価値観も異なる場合には、それがお互いにうまくいかないことにもなりかねない。お互いに支え合いたいという発想がうまく機能することが望まれる。

### (8) コーディネーターの重要性

利用者の希望などを十分に把握し、調整するコーディネーターの存在の必要性が次のように強調されている。「やはり、ヘルパーを派遣する時利用する側の希望をキチンと確認するコーディネーターが必要だと思う。そういう立場の人がキチンと定められていないのは

使いづらい。」

#### (9) 医療ケアの必要性

重症心身障害児の家族の願いは、医療ケアと介護との充実だと思われる。これらを進めていくには、医療の世界をもっと地域に引き寄せなければならない。

事例からも医療的ケアの必要な重度重複障害者にとって訪問看護ステーションは欠かせない存在である。そして、かかわりの期間が長くなれば、体調その他のことへの気づきも速やかとなり、家族全体の安定につながる。

#### (10) 家族への支援

兄弟のかかわりというのは、本人への大きな力となっているようだ。人間関係や生活にふくらみが出てくるとも言える。一方、兄弟・家族を含めた支援が必要であるとも言える。

また、言葉の有無ではなく、コミュニケーションの有無が大切であり、そのことを意識して生活していることが、事例の家族にみる暖かさと言える。「ことばはしゃべりませんが、日常の生活の話はかなり分かることもあるような気がします。できるだけ予定も話して本人に伝えるようにしたいなと思います。こちらの話が伝わると笑顔で答えてくれます。」

#### (11) ピアカウンセラーとしての母親

母親は、ピアカウンセラーとしても活動している。これからの重心の母親はこうした分野にもおおいに活躍すべきであろう。

兄は知的障害があり、現在はグループホームに入居しているが、家族一人一人が自立に向けて生活を進めており、それが家族全体の安定につながっているように感じられる。

## 6. DZさんと彼女が利用する日常支援サービスについて

### 6-1 DZさんのプロフィール

インフォーマントのDZさんは45歳の女性。現在、職業は持っていないが、週1回作業所に通ったり、ピアカウンセリングの勉強をするなど、積極的に充実した生活を送っている。

#### (1) DZさんの障害について

DZさんは1種1級の身体障害者で、聴覚障害2級と視野障害2級・視力障害3級、四肢麻痺2級の障害を併せ持っている。

聴覚については、現在、全く聞こえない。ただし、非常に大きな音がした時は空気の振動で、それを感じることができるという。

DZさんは小学校6年の時に聴力低下が始まり、重度感音性難聴と診断された。20歳位から補聴器を使用していた。この頃より時々手話講習会に通ったが、何とか聞き取れていたことと、身近に聴覚障害者がいなかったこともあり手話は身につかなかった。しかし、26歳で全く聞こえなくなり、他のろう者や通訳者とのコミュニケーションを通じて手話や指文字を身につけたという。視力低下以前は手話や指文字及び筆談が中心であったが、現在は相手の指文字をDZさんが触って読み取るか、明るい所なら太マジック文字で5cm角程度に書いたものを見せ、DZさんは声で返答するという方法でコミュニケーションが可能である。DZさんの発音は乱れがなく、とても明瞭で聞き取りには全く問題がない。

一方、網膜色素変性症により高校時代から夜盲症があった。22歳で白内障の手術を受け、ハードコンタクトレンズを使用して明るい場所なら1.0程度の視力が得られていた。しかし、8年前より視力低下が進み、視覚障害となる。現在は中心暗点があり、周辺視力もぼんやり見える程度。人影で性別は判断できるが表情まではわからない。色の識別も難しい。文字は明るい蛍光灯(電気スタンド)直下なら5cm角程度の太マジック文字が読めるので、明るさが得られれば、筆談が可能である。また、慣れた環境であれば単独での外出も可能である。

現在もハードコンタクトレンズおよび眼鏡を使用している。

また、中学校3年生の時より手の震えが始まり、何かしようとする時に大きく震えてしまう。そのため、日常生活の中でも作業に制限ができてしまう。

#### (2) DZさんの生い立ち

DZさんはO県出身で両親と妹2人弟1人は今もO県在住だが、妹弟はそれぞれ独立している。妹1人と弟はDZさんと同様に聴覚と視覚の障害を持っている。しかし、DZさんの知る限りでは血縁に同じような障害を持つ人は他にいない。

DZさんは高校卒業まで普通学校で教育を受けた。卒業後は美容専門学校に1年通い、インターンとして半年位勤務したが、手の震えのために美容師になることを断念した。したがって、美容師免許は取得していない。退職後は家事手伝いとして家庭に入っていた。その後、26歳から3年間、授産施設「O県センター」に通所した。全く聞こえなくなったのは通所手続き後であった。同センターでは和文タイプの訓練を受けた。ワープロの習得を希望していたが、その対応が難しく悩んでいたところに、当時上京していた弟から公立身体障害者リハビリテーションセンターの情報を得た。30歳の時、公立身体障害者リハビリテーションセンターでワープロの職業訓練を受けるために上京。生活訓練科を経て、1年間職業訓練を受けた後、T県で就職。その時より現在の住居に生活している。だが、8



年前視力低下により退職し在宅生活になった。退職後3年間、Y視覚障害者対象の生活訓練機関（以下、Y訓練センター）に通い、生活訓練を受けた。また、3年前から作業所に通っている。

### （3）DZさんの住居

DZさんの住む部屋はY市中心地にほど近く（Y市駅から約2km、バスで5つ目。JR,S駅とK線H駅から徒歩圏にある。）交通の便に恵まれた、木造2階建てアパートの2階にある。家賃は約7万円。バス路線である幹線道路から5分ほど歩いたところに位置している。周囲は古くからの住宅街という風情で、幹線道路から一步入ると細い路地が入り組んでいる。最寄りのバス停前に小規模のスーパー、家の近所には昔ながらの小さな商店が幾つかある。役所や図書館など日頃利用する公共施設にも徒歩で通うことができる。

部屋は6畳ほどの部屋が2部屋と4.5畳程度のダイニングキッチン、風呂・トイレがついている。ベランダはついていないが廊下があり、そこに洗濯物を干すことができる。玄関を入ると食堂を兼ねた台所があり、その奥に2部屋が続いている。廊下があるので各部屋へは台所から直接行けるようになっている。台所には食卓・食器棚や調理器具、全自動洗濯機が置いてある。次の部屋にはTVや小さな座机、収納ボックスなどがあり居間として使用している。一番奥の部屋はベッドとパソコンが置いてある。このアパートはT県に就職が決まった時、Y市にいた弟と同居するために探した物件で、当時弟も難聴だったが、口話での会話が可能だったので弟がすべて交渉してくれた。弟は同居から3年間後、故郷に戻り、以後現在までDZさんは単身生活を送っている。

大家は階下に住んでおり迷惑をかけたこともあるそうだが、文句を言われることもなく住み続けることができている。

## 6-2 DZさんの暮らし

本人の記録と筆者の聞き取りをもとにDZさんの2週間の暮らしを簡略に紹介する。

### （1）DZさんの2週間

2003年12月4日（木）

#### 朝の支度

朝7時30分、起床。自分で朝食の支度をして、トーストとコーヒー、ヨーグルトを食べた。朝食の内容はいつも決まっていて、トーストがチーズトーストになるくらいである。トースターはセットしやすいように目盛りをマジックで太書きしているが、適当にセットして匂いで焼き加減を判断している。

もともと朝入浴する習慣だったので、入浴（シャワー）も朝の身支度の一つである。夜の入浴は浴室の照明により、外から見える心配もあるので避けている。

この日はゴミ収集日だったので、ゴミをまとめた。

#### デイサービスの利用

9時頃、家を出てJ作業所に向かう。途中ゴミ出しをした。徒歩でJR,S駅に行き、JR,N線で4駅先のI駅まで行く。I駅からJ作業所までも徒歩で行った。慣れたルートなので、すべて単独で移動することができる。

乗車券はSuica（スイカ）を使用している。この日、残高が少ないと思いながらも自分では確認できないので、少し緊張しながら改札を通った。

降車駅の確認は停車駅の数を数えたり、景色で判断したり、左右どちらのドアが開くかな

ども注意して判断している。

9時45分、J作業所に少し遅刻して到着。J作業所には3年前に所長の講演を聞き、共感したことがきっかけで通っている。職員の多くは、手話通訳の資格も有しており職員とのコミュニケーションにはあまり不自由はない。

作業所にはDZさんが可能な作業もあり、行事などで未知の場所に行く機会もできた。月1回の講演会もあり、それもDZさんにとっては楽しみである。

作業そのものへの期待はないが、情報収集・交換や交流が主目的で通っている。ただ、情報交換という名目のおしゃべりは楽しいが、さまざまな障害を持つ利用者が集まっており、他の利用者とのコミュニケーションには通訳が必要な時も多い。職員に通訳してもらえることもあるが、必ずとは限らないので、話の輪に入れず淋しさを感じたりすることもあった。それは残念だが仕方がないという気持ちもある。また、利用者の中には、多少は手話を覚えようとしてくれる人もいる。

#### 聞き取り調査の打ち合わせ

11時、今回の調査依頼のため、筆者らが初めてDZさんと会う。手話のできる職員から、DZさんを紹介される。初めに、あらかじめ用意してきた筆者らの自己紹介文などを見せたが、文字の大きさや線の太さによっては読めないものもあり、DZさんから指摘される。また、用意していた用紙も不足して、作業所で用紙およびペンを借りた。作業所には裏の白いチラシ(コート紙)をB5~A4サイズに切ったものと水性マジックが大量に用意されていた。

面会した部屋に蛍光灯のスタンドを持ってきて、その真下で書いたものを見せ、DZさんが声で返答するやりとりが1時間ほど続く。筆談に不慣れな者にとって、「書く」という作業は非常にもどかしく、DZさんとのやりとりに疲労を感じるとともに今後の調査において聞き取りにかなりの時間を要するのではないかという不安を感じた。

初回の面会は1時間ほどで終了し、次回の約束をした。

#### 帰路

15時30分、作業所から単独で帰宅。帰りはY駅まで出て、そこからバスに乗った。Y駅のバス乗り場にはDZさんの利用する路線のバスしか来ないので、乗車時に行き先を確認する必要はない。

だが、自宅からY駅までバスで出る時は、最寄のバス停には違う路線のバスも来るので行き先を確認する必要がある。確認方法は①バス正面の行き先系統の数字が見えることがある。(正しいバスは103系統、別のバスは57系統で同じ数字が使われていないので、どれか一桁だけでも確認できれば間違いはない。)②「このバスは103系統ですか」と書いたカードを運転手に見せる。運転手には首を大きく振って返事するようにお願いする。「私は耳が聞こえず、視力も弱いです。」と書いたカードも用意している。(視力低下直後は自分が盲ろうであることをなかなか言えず、運転手の返事が確認できないため失敗も多かったが、他の盲ろう者の「自分からアピールして理解してもらう必要がある」というアドバイスに納得し、最近は盲ろうであることを自分から言えるようになってきた。)③万一、違うバスに乗ってしまった時でも、バス停を出発してすぐルートが分かれるので、その時点(バスが角を曲がった時)に間違いに気づく。ルートが違うことに気づいたら、バスを降り大通りに出て目的のバスに乗り直す。

また、降車時の確認は周囲の景色で判断できる。特に夜はバス停前のスーパーに自販機

がたくさん並んでおり、とても明るいのでよくわかる。

#### 帰宅

16時30分帰宅。パソコンをしたり、洗濯物を取り込み、たたんだ。見えていた頃に購入した靴下の中には微妙な色合いのものも多い。視覚的に判断しづらい物もあり、時々、左右色違いに組み合わせてしまうこともある。

#### 夕食

20時30分。ホームヘルパーの作ったものを温め直して食べた。

#### TV鑑賞

21時、連続ドラマを見る。先日たまたま見たらとても「いい感じ」だと気に入り、続けて見ている。老人ホームを舞台にしたドラマである。テレビはワイド型 22 インチの物を拡大読書器と接続し、兼用している。

#### パソコン

22時30分から再びパソコンに向かう。パソコンは2年前より導入。パソコンを始めたことで連絡が楽になった。FAXでは手書きしなければならない。手の震えのため手書きは時間がかかる上に作業負担も大きい。そのため用件のみをまとめる傾向になりやすい。このような癖がつくと、細かく説明しなければならないことまで省略してしまいがちであった。それがパソコンを使用することで解決された。

また、メールでは複数の人と一度に連絡を取れるのが気に入っている。インターネットは使用していない。利用したいとは思っており、以前、使えるように設定してもらおうと試みたことはあるが、無理だったようで自分では使わないことにした。

モニタのサイズは 17 インチ。文字を拡大表示して使用している。PCの操作はすべてキーボードで行う。マウスは使用しない。手の震えがあるため余計なキーを押さないように、各キー位置に指が入る穴を開けたキーボードカバーを使っている。また、使用頻度の高いキーが区別しやすいように色をつけたり、突起をつけるなどの工夫をしている。25時の就寝までパソコンを使用した。

2003年12月5日（金）

#### 家事援助サービスの利用

9時にホームヘルパーが来た。食事の準備と掃除を依頼する。食事は次回訪問時までの外食予定などを考慮して必要な分だけの料理を依頼する。献立内容については、偏ってしまうと思うので注文せずにホームヘルパーに任せている。

ヘルパーは週2回、月曜日または火曜日と金曜日に来てもらっている。1回当たり3時間。この日も12時まで3時間の援助を受けた。ヘルパーは二人が交代して訪問するので献立が重ならないようにヘルパーが献立を記録するノートを作っている。

#### 活字読み上げソフトの習得

10時にY訓練センターの生活指導員が来た。視覚障害者用活字読み上げソフト「よみ姫」の使用方法を教えてもらっている。この日の課題はファイルの保存と削除。「よみ姫」は現在、体験版を使用しているが、使ってみて良さそうであれば購入したいと思っている。

この指導に関しては、DZさんがY訓練センターに直接申し込んでおり、福祉事務所等での手続きはしていない。DZさんはこのサービスをボランティアでも支援費制度でもないと思っているが、どのような福祉制度なのかは知らない。

Y 訓練センターは DZ さんの家からバスで 1 本の場所であり (バス停 9 つ目)、視力低下により退職した後、3 年間通所して訓練を受けたことがある。当時、ケースワーカーからは公立身体障害者リハビリテーションセンターへの入所を勧められたが、アパートを放置したくなかったので、通所できる Y 訓練センターを選んだ。

当時、白杖操作やガイド法、点字、指点字などを習ったが、白杖は手の震えのため足とあわせることができず使いこなせなかった。ガイド法も声での説明が多く、盲ろう者対応のガイド法がないと思っていた。点字はパーキンス・ブレイラーを使って書くことは可能になったが、触読は難しい。今回のパソコン指導は自分のパソコン環境で行わなければ意味がないので、訪問指導になった。11 時 40 分まで 2 時間弱、指導を受けた。

#### 友人との外出

13 時 40 分。友人 Y さんと会うために家を出た。Y 市までバスで出て、待ち合わせ。Y さんは通訳・介助員で、1 年ほど前より友人として親しくなった。この日は通訳・介助員としての「派遣」ではなく友人としてボランティアで介助してもらった。

Y さんとのコミュニケーションはほとんど指文字で行う。Y さんは同年代の健常者で、夫は聴覚障害者である。最近は頻繁に行き来している仲である。

Y さんに付き添ってもらい、年末年始に O 県帰省するための航空券などの受け取りと Suica (スイカ) の入金をすませた。その後、地下鉄で T 駅に行き、Y さんの車で関東圏では有名なホビー材料・雑貨を取り扱う大型店で買い物をした。筆記用の水性ペンのカートリッジを買いに行ったのだが、在庫がなく注文だけした。また 100 円ショップにも立ち寄り、お菓子や安全ピンなど日用品を買った。携帯歯ブラシセットも探したが気に入ったものがなく、他の店で購入。買い物をすませて Y さん宅に行った。

#### 友人とのおしゃべり

午後 8 時。手料理をごちそうになりながら、おしゃべりを楽しむ。泊まるつもりではなかったが、「泊まっていけば」ということになった。Y さん宅にはこのように泊りがけで遊びに行くことも時々あり、友人は夫を寝室から追い出して DZ さんと床に就く。この日は、Y さんの夫が夜遅くに帰宅してから 3 人で宴会となった。26 時 30 分就寝。

DZ さんによると「Y さんとは多くの共通点があるが性格は異なる。そのためお互いに教え合ったり、自分の足りない部分を補い合うことができる。それが Y さんという時間が長くなる理由」とのこと。

2003 年 12 月 6 日 (土)

#### 友人宅にて

7 時 30 分に起き、9 時 30 分の朝食までおしゃべりしていた。朝食後、年末年始の O 県帰省について相談した。O 県帰省の際、往路 (12 月 20 日) は空港まで Y さんに送ってもらう予定で、飛行場および機内は航空会社に介助を依頼してある。N 空港には家族が迎えにくるか、無理ならタクシーで実家に帰る。復路 (1 月 13 日) は、数日前から O 県に遊びに来てくれる Y さんと一緒に帰る。(Y さんご夫婦が来るが夫は 1 日早く帰る予定。)

11 時 30 分。Y さんと共にバスで I 駅に出て、S 線で Y 駅に行きバスに乗って自宅に戻る。

#### 読書

13 時 30 分帰宅。ホームヘルパーが作った料理を温め直し Y さんと昼食。

15時から視覚障害者用活字読み上げソフト「よみ姫」を使用して、読書のために本をパソコンに取り込む。ときどき読み取りミスがあるので、Yさんをお願いして原本と照らし合わせて誤字を修正してもらう。はじめにYさんにソフトの操作方法を教えた後、本からの読み取りと修正を依頼する。Yさんは18時に帰るまで作業した。

Yさんの帰った後、さきほど入力してもらった本を読む。『降りていく生き方』（横川和夫著・太郎次郎社発行）という本で、北海道にある「べてるの家」という精神障害者の共同住宅の人々への聞き取り調査をまとめたノンフィクションである。今、DZさんの興味のあることなので読みたいと思っている。

#### 洗濯

Yさんに本の読み込み作業をお願いしている間、DZさんは洗濯をした。勤めていた時の習慣から洗濯は週に2回程度。一人暮らしなのでそれで不自由はない。

DZさんは視力低下後、洗濯機の操作に大変さを感じている。洗濯機は見えていた頃から同じものを使用しており、スイッチのどっぴりが少ないタイプである。そのため触覚的な確認がしづらく、視覚的に判断しなければならないが、目を近づけても判別は難しい。特に水位表示は「高・中・低・少」という小さなすみ字の横に赤い小さなランプが点灯するようになっているが、ランプの点灯はわかってすみ字が小さくて見えないため、今どの水位になっているのかがわからない。

色柄物と白いものは目で判断して分けている。干す時は手探りの時もあるが、どちらかというと視覚的に判断して行うことが多いとのこと。

#### 夕食

20時、夕食。味噌汁にご飯を入れて自分で雑炊を作る。ガスコンロに点火したかどうかは炎が見えることと手をかざして熱を感じるかどうかで判断している。

#### ぬり絵

夕食後、拡大読書器でぬり絵をした。DZさんは毎週月曜日の午前中に幼稚園で手話を教えている。DZさんが通っている教会の人から「行くところがないと寂しいだろう」と、その教会の付属幼稚園で手話指導することを提案された。「教える」といっても実際に教えているのは5分程度であとは園児との交流が主である。この活動の際も友人Yさんが通訳・介助をしてくれる。ただし派遣制度は利用できず、Yさんはボランティアとして毎回手伝ってくれている。

手話指導に行った時、DZさんは園児と一緒に給食も食べている。昼食後、いつも幼稚園の先生が園児達に絵本の読み聞かせをしており、DZさんもやりたいと思った。初めは絵本の文字だけ大きく大きく書きかえたものを貼りつけて使用していたが、今は絵本そのものを自分で読みやすいように太マジックで書き写して、その挿絵をぬり絵している。

DZさんは五味太郎氏の絵本が好きで、読み聞かせにも五味氏の絵本を使用している。文章が簡潔なので拡大しても納まりやすく、絵も個性的でユーモラスなためである。以前絵本フェスティバルに行った時、五味氏の講演会を聞き、作者本人と直接話しをする機会があった。その時、事情を説明しDZさんが絵本を加工することを了解してもらっている。24時30分に就寝するまで作業が続いた。

2003年12月7日(日)

### 教会に通う

10時30分、教会に出かけた。K線H駅まで歩いて行き、2駅先のM駅まで行く。この日は、礼拝の後12時30分から14時まで親睦会が開かれた。

教会では以前、DZさんが講師となり月1回お茶を飲みながら手話の勉強会を開いていた。けれども教会の行事と重なることが多く、定期的な開催が困難になり、勉強会は自然と行われなくなってしまった。今回、久しぶりにそのメンバーが集まり親睦会を開いた。教会の人たちとは指文字もしくは筆談でコミュニケーションをとっているが、3人ほど指文字の上手な人がある。ほかにも数名、たどたどしいが指文字ができる人がある。

### 帰宅途中に買い物

14時、教会を出る。K線M駅から乗車、H駅で下車して歩いて帰った。途中「トポス」というディスカウント・ストアに寄って買い物をした。トポス2階には100円ショップがあり、今度の交流会でプレゼント交換するための箱入りクッキーを買った。商品の選択は自分で見て、なんとか選ぶことができた。

### 疲労

15時30分。家に着いた。洗濯をしたり、拡大読書器でぬり絵をしたりしたが、1時間半ほどすると目が疲れて気分が悪くなった。19時30分から1時間ほど横になるが、疲れがひどく、夕食も摂らずに21時に就寝。

2003年12月8日(月)

### 聞き取り調査1

10時、聞き取り調査を行うために筆者がDZさん宅を訪問。訪問の日時は前回打ち合わせした時に決めておいた。DZさん宅の呼び鈴にはパトライトを接続しているが、DZさんにはパトライトの光量が弱く、視野に入っている時でなければ光っていることに気づかない。そのため、約束の時間の少し前には鍵を開けておくので、呼び鈴を数回押しても応答がなかった時は勝手に入ってきて構わないと伝えられていた。

呼び鈴を押すと玄関ドアの近くに設置されたパトライトの点滅が外からも確認できたが、DZさんはなかなか気づかない。初めて訪ねる家に勝手に入るのも気がひけたため、DZさんが気づくまで根気良く呼び鈴を押してみた。ようやくドアが開き、DZさんが筆者の名前を呼びかけた。

ダイニングキッチンを通り、奥の部屋に通される。本だなやカラーボックスが壁に並べられ、中央に40×60cmほどの座卓が置かれていた。座卓の上にはスタンドが置いてあり、DZさんの座った右横には拡大読書器とTVモニタが並べて置かれていた。部屋の照明はペンダント型の蛍光灯のみで外光が入らないこともあり、暗い部屋という印象を受けた。

筆者も指文字でのコミュニケーションが多少可能であるが、不慣れなため時間を要することと正確なやりとりのために筆談で話をした。筆者の用意したペンは今回購入したばかりで芯がまだ硬く、思ったよりも細書きになってしまった。その点をDZさんにも指摘された。仕方なく、文字が細い時はそれを拡大読書器で拡大して読んでもらった。拡大読書器は白黒反転して使用している。

DZさんに依頼した生活記録は、日時と主な出来事が箇条書きでパソコンに入力されていた。それを見ながら筆者が質問をしていく形で進めた。

午後からパソコン指導やヘルパーの訪問があるということなので、12時で聞き取りを終えた。

### 筆者と昼食

この日は午後からホームヘルパーが来る予定だが、前回の訪問から今回までの間に予定外の外出などがあり、作ってもらったおかずが残ってしまっていた。DZさん1人では食べきれないので、筆者も手伝って欲しいと言われ、二人で食べ切ることにした。DZさんは手の震えのため、料理によって箸、スプーン、フォークを使用、お茶もマグカップを使用してストローで飲む。片付けは筆者が行った。

### パソコン訪問指導

Y訓練センターの指導員は13時に約束していたが、交通事情により少し遅れて到着。

「よみ姫」の購入を検討するにあたり、視覚障害者の情報バリアフリー化支援制度やソフト購入についての説明を受けた。指導員とのコミュニケーションは指導員がパソコンに入力した文章をDZさんがモニタに近づいて読み、DZさんは声で返答するという形で進めていく。時々、指導員がDZさんの話しに同意する時に「認める」という意味の手話に似た形で、握りこぶしを人の頭に見たてて頷くように動かして返答することもあった。画面は黒地に白文字の表示で使用。DZさんはモニタに20～30cmの距離に近づき、1画面に5行程度入る大きさに拡大した文字を確認できるが、この文字の大きさはDZさんが読むには少し小さい。DZさんにはもう少し大きい方が読みやすいが、その大きさに設定してしまうと画面に入る文字数が少なくなってしまう、入力には不便である。読みやすさよりも入力のしやすさを優先した倍率設定にして使用している。

DZさんにとって手書きの筆談も好ましいが、手書きは人によって読みにくい字を書いたり、書き進むにつれて字が小さくなってしまったり崩れてきてしまうこともある。また明るさが必要なため、使用できる場所が限定されてしまう。そういう点ではモニタの文字は均一なのでそちらの方がいい場合もある。また、会議や講演会などで会場が暗い場合はパソコン通訳が必要である。モニタ自体が光るので暗いところでも読むことができる。

また、筆談より早く、情報量も多くなるという利点もある。

### ホームヘルパーとのやりとり

13時55分、ホームヘルパーが訪問。買い物と簡単な清掃、3日分の食事づくりを依頼する。ヘルパーとのやりとりは筆談で行う。DZさん宅には数十本の太マジック（黒）が常備されている。友人Yさんが来ている時も多いので、その時は通訳してもらおう。ヘルパーにとっても筆談より通訳してもらおう方が負担感が少ないようだ。

依頼内容を打ち合わせた後、DZさんはパソコンの学習に戻った。

### 通訳・介助員派遣申請

ヘルパーが帰った後、通訳・介助員派遣申請を4件行った。現在、月に3～4回派遣を利用している。定期的な利用は盲ろう者通訳講習会の聴講、月1回の通院、H市にピアカウンセリングの勉強に行く時、「気持ちの聞き方」という勉強会出席のため（月1回）である。他にも講演会に参加するときなどに利用している。

通訳・介助員派遣の費用は無料で、今は利用回数に制限はない。しかし、今後この制度が支援費制度のサービスのひとつに組み込まれた場合、費用が発生したり、回数に制限ができたりするのではないかとDZさんは心配している。通訳・介助員の指名も可能で、自宅まで来てもらう時やプライベートな内容の時には信頼できる人を指名している。それ以

外の場合は DZ さん自身が「通訳・介助員を育てる」という気持ちで、指名をせずにいろいろな通訳・介助員と接するように心がけている。

### 情報収集

20 時、TV を見た。NHK「地球・ふしぎ大自然」の後、NHK 教育テレビ「手話ニュース」を見た。新聞をとっていないのでニュースは手話ニュースやパソコンから得ている。TV ニュースには字幕放送のものもあるが、アナウンサーの話すスピードが速いのか字幕が早く流れてしまい DZ さんはずついていけない。その点、手話ニュースはニュースそのものを簡単にまとめてあり、わかりやすい。「手話」ニュースではあるが、DZ さんは手話ではなく字幕を見ている。情報収集のために、家にいる時はなるべく見るように心がけているという。

TV の後はパソコンに向かう。2003 年 9 月から盲ろう者向けにメールでニュースを配信するサービスに加入した。ニュースは月曜日から土曜日まで毎日送られてくるが、政治経済など堅い内容だけなので、友人 Y さんが文化欄や家庭欄などをメールしてくれる。このように情報収集にはパソコンが欠かせず、どうしても使用時間が長くなってしまう。この日も 24 時の就寝までパソコンを使用。

2003 年 12 月 9 日（火）

### 友人 Y さんとクッキー作り

12 時に家を出てバスで Y 駅に出る。S 線 I 駅で Y さんと待ち合わせ、車で Y さん宅へ行く。昼食後、二人でクッキーを作る。

このクッキーは 12 日のピアカウンセリング勉強会に持っていくものである。12 日は食べ物を持ち寄ることになり、DZ さんはクッキーを持っていくことになった。その話を Y さんにしたところ「手作り」を勧められたが、一人ではできないため Y さんに手伝ってもらうことになったのである。

### コミ学習会に参加

18 時、県民センター（Y 駅から徒歩 5 分）で開かれるコミ学習会に参加。コミ学習会とは神奈川盲ろう者ゆりの会・コミュニケーション対策部・コミュニケーション勉強会のことであり、月 2 回程度開催されている。

コミ学習会ではまず自己紹介をして、手話・点字初級・点字中級のグループに分かれて 30～40 分程度の学習を行う。その後は実習的にクイズやゲーム、意見発表などを行っている。

この日はミニ講演会が行われた。盲ろうの講師が話したいことを 10～15 分話して質疑応答するものである。この日は女性講師の子供が夜中に急病になった時にとっても困ったという話で、FAX で 119 番したがつながらず、また講師は盲ろう者として派遣事務所に登録をしていなかったため、通訳・介助員も使用できない。夫も聴覚障害者であり、結局もう 1 人の小学生の息子をたたき起こして 119 番通報させ、通訳として病院まで付き添わせたと内容の経験談であった。DZ さんは、使えるはずの FAX での 119 番通報ができなかったという問題の大きさを感じるとともに登録していなくても緊急時は通訳・介助員の派遣が受けられるべきだとも思った。今まで DZ さんは自分が救急車の世話になることは想像したことはなかったが、この話を聞き、日頃からの準備が必要だとも思った。



## パソコン

22時、会場からバスで自宅に戻り、24時30分の就寝までパソコンに向かった。

## 2003年12月10日（水）

この日は午前中にY訓練センターの指導員が来訪し、パソコンの指導を受けた。午後はパソコンに向かい、合間に洗濯をした。夕食後、手話ニュースやテレビドラマを見てから、拡大読書器で郵便物の確認と読書をした。

## 2003年12月11日（木）

### 聞き取り調査2

10時に訪問の約束をしていたので、今回もDZさんが気づくまで呼び鈴を押してみる。DZさんは食事の途中で、パトライトの点滅にもなかなか気づかなかった。筆談でのやりとりもだいぶ慣れてきたので、かなりスムーズになり、筆者の負担感もなくなってきた。ただ、やはり普通の会話と異なり、書いている時間が必要なので会話のズレやテンポが気になる。また「会話に近い状態」を心がけて、なるべく口語体で書きたいが、どうしても文語体で内容をまとめた表現になりやすいことも気にかかる。

### 代電話

13時30分、友人Yさんが来た。代電話をお願いする。プライベートな内容の時の代電話はYさんに依頼している。それ以外ならホームヘルパーなど他の人に依頼することもある。

先日、Yさん宅近くの店で特売があると教えてもらい、ハンドクリームなど数点の買い物を頼んでいた。その品物も持ってきてもらった。また、「よみ姫」による読み取りミスの訂正などもお願いした。

Yさんは一緒に夕食を食べ、おしゃべりをしたりして22時50分に帰った。

DZさんはYさんと出会ったことで生活が大きく変化した。行動範囲が広がり、情報量も増えた。今はYさんがいるからか生活に不便や不自由さを感じることは少なくなった。もしYさんがいなかったら、今Yさんをお願いしていることをすべて通訳・介助員に依頼しなければならない。けれども、内容によっては通訳・介助員の派遣を断られることもあるので、できなくなることも出てくるだろう。

Yさんが帰った後は、パソコンに向かい25時に就寝。

## 2003年12月12日（金）

### ピアカウンセリングの勉強

10時、ピアカウンセリングの勉強のためにH市まで出かけた。バスでY市まで出て、通訳・介助員のKさんと会った。KさんとH市まで行き、そこで通訳・介助員のIさんと合流した。以前は、このピアカウンセリングの勉強に通う時の通訳・介助員は1名だけを派遣してもらっていたが、その人が病気等で都合が悪くなった時に困った経験から、現在は常にこの2名を指名依頼している。

ピアカウンセリングの勉強の時はパソコン通訳で、パソコンの入力方式が点字入力になっているため（視覚障害の人がパソコン通訳することを目指している。その人が使用しているパソコンを使用するために点字入力となっている）、通訳可能な通訳・介助員が限定さ

れてしまう。

また、本来、障害者のみで行われるピアカウンセリングにおいて、たとえ通訳であっても健常者が関わることは原則に反している。だが、主催者側で通訳の調整が難しかったことから、特別に認めてもらっているという事情がある。そのため、毎回違う通訳・介助員が関わることは好ましくなく、DZさんはピアカウンセリングの勉強会に通う際の通訳・介助員は、KさんとIさんのみを指名している。

11時40分、通訳・介助員とともに外食して、勉強会の会場に向かった。

13時30分から16時30分、ピアカウンセリングの勉強。この日は、1年のまとめとして今年1年間のピアカウンセリングの学習について反省や感想等を語り合った。ピアカウンセリングの勉強会は毎月1回行われ、講師は視覚障害者と聴覚障害者で、マンツーマン指導である。DZさんは将来的にはピアカウンセラーになることも考えてはいるが、自分の学習速度からすると実現するのはかなり先の話だと思っている。

#### 外食

勉強会終了後、2名の通訳・介助員とともにH市からY駅まで戻ってきて、3人で夕食。外食は一人ではしないが、誰かと一緒であれば可能である。お店を選ぶ時の条件は暗いと見えにくいので、「明るい店」。メニューに関しては食べたいものよりも食べやすいことを優先する。DZさんは、「これが食べたい」という欲求はあまり強くないので、この点に関して欲求不満を感じることはないという。最近は薬のおかげで手の震えが落ち着いているが、震えが強くと汁物は食べられないので、例えば中華料理店ではラーメンではなくヤキソバやチャーハンを選択するなどの配慮が必要になる。また、スプーンで食べられるようなものを選んだり、皿数の多いものよりカレーなど一皿ですむものを選ぶことが多い。

この日は鶏肉のソテーを食べた。このように小さく切る必要のある場合は同行者に切ってもらったり、また、食べられないものがある場合は取り除いてもらったりする。同行者がいる時しか外食しないので店員に援助依頼することはない。夕食後は19時30分に通訳・介助員と別れ、バスに乗って帰宅。パソコンをして24時就寝。

2003年12月13日（土）

#### パソコンソフト販売店へ行く

9時。バスでY駅まで出て、Yさんと待ち合わせた。T線に乗り、M駅まで行き、視覚障害者用システム販売店を訪ねた。この販売店は社長が視覚障害者であり、今回が初めての訪問である。この販売店を知ったきっかけは、Y訓練センターの生活指導員に紹介されたと記憶している。

この日は、スキャナを使った読み取りソフトと宛名書き住所録ソフト「アドボイス」を見る目的で行った。

#### 帰省準備

YさんとY駅に戻って昼食後、旅行店で航空券のN市到着時間の確認をしたり、コンタクト店でコンタクトを受け取った。DZさんは白内障手術後、ハードコンタクトを使用しているが、なくしてしまうことも多く、自分で見つけることも難しい。また、度数などが一般用と違うため特別注文になり、即日購入はできない。この日のコンタクトもスペア用だった。

その後、帰省土産の菓子を購入・発送したり、父親への土産を購入した。

DZ さんにとって帰省は親孝行目的である。DZ さんによると O 県は社会資源に乏しく、O 県に戻っても家に閉じこもる生活になってしまうため、今のところ戻る気持ちはない。

夕食後、Y さんと別れて、21 時 30 分帰宅。24 時 30 分就寝までパソコンに向かう。

2003 年 12 月 14 日 (日)

### S 県盲ろう児の会に参加

9 時。バスで Y 駅に出て、Y さんと待ち合わせした。S 県盲ろう児の会「ヘリコプター」に参加するため、JR,S 線に乗り K 駅 (S 県) まで行った。11 時 30 分に昼食をとり、13 時から 17 時 30 分まで会の活動に参加した。

この会はピアカウンセリングの勉強に通う時の通訳・介助員の 1 人が深く関わっている会で、毎月第 2 日曜日に活動している。9 月頃に誘われてから毎月参加している。いつも 10~20 名が参加、保護者も参加している。中学 1 年生の盲ろう児がリーダー的存在だが、参加者は様々で、赤ちゃんのような子から健常児 (小 5) も参加している。また、DZ さんのように S 県外からの参加者もいる。

DZ さんの話では、会の主旨はレクリエーションを通じて盲ろう児の世界を広げることが目的と思われる。この日はクッキー作りにチャレンジした。DZ さんは子供嫌いではないが、特別好きというわけでもない。ただ、子供の成長する様を眺めるのは面白く感じている。

リーダー格の盲ろう児と都内から参加している盲ろう児は指文字でコミュニケーション可能である (親から学んだらしい)。しかし、他の会の盲ろう児たちは知的障害もあるようで細かいコミュニケーションはできない様子。何か特定のサインはあるようだが、DZ さんはまだそこまで詳しいことはわからない。

終了後、Y 市に戻り、夕食後 Y さんと別れた。20 時 30 分帰宅し、TV を見たりパソコンをして 25 時就寝。

2003 年 12 月 15 日 (月)

### 幼稚園訪問

9 時に家を出て、K 線 H 駅から M 駅まで行き、Y さんと待ち合わせた。ボランティアで手話指導している幼稚園へ行った。この日はクリスマスが近いのでクリスマスページェント (キリストの生誕劇) が行われた。

先にも述べているが、この幼稚園に行く時の通訳・介助は Y さんがボランティアで協力している。初めは通訳・介助員の派遣を依頼したが、このケースは派遣に該当しないとの経緯があり、Y さんをお願いしている。派遣は通勤・通学には利用できないという条件があるので、この幼稚園に定期的に通うことは「通勤としてみなされた」と DZ さんは考えている。

### クッキー作りに挑戦

幼稚園からの帰り道、回転寿司で昼食。13 時。Y さんと帰宅。先日、S 県盲ろう児の会で作ったクッキーが簡単だったので、帰省中に一人でも作れるのではないかと考え、練習してみた。レシピはグラム表示なので、そのままでは 1 人で計量することは無理である。だが、計量カップなら 1 人で計れるので、Y さんが計量カップでどのくらいになるか確認してくれた。14 時~17 時ホームヘルパーが訪問。Y さんがいたので通訳をしてもらう。

ヘルパーが帰った後、クッキーをオーブントースターで焼いた。温度調節やタイマーセットの目盛りはYさんに確認してもらった。

クッキーが焼きあがるまでDZさんはぬり絵をし、Yさんに「よみ姫」の読み取りミスの修正をお願いした。

後日、そのクッキーを筆者もごちそうになったが、味はおいしく、形も手作りのよさが活かされた申し分のないできばえであった。

Yさんは夕食後、22時50分帰宅。その後TVやパソコンで過ごし、24時30分就寝。

2003年12月16日(火)

7時30分起床し、午前中は帰省の荷物をまとめた。11時30分Yさん来訪。昼食後、午前中にまとめた荷物を発送するために徒歩で郵便局へ行った。それから、役所福祉課に行き、「よみ姫」と「アドボイス」の助成申請(情報バリアフリー化制度利用)手続きを行った。

その後、バスでY駅に出て、地下鉄でS駅まで行った。徒歩でY市障害者スポーツ文化センターに行き、Y市障害者社会参加推進センター(盲ろう者通訳・介助員派遣の窓口)のH氏と相談した。

H氏は派遣コーディネーターの上司という立場であり、「パソコン通訳派遣」に関する相談をした。DZさんのパソコン通訳派遣は10月中旬までは認められていたが、市福祉課の担当者が認めないと言っているらしく急に使えなくなり困っている。パソコン通訳の必要性を細かく説明して、それを市の担当者に伝えて欲しいことやもっと掛け合って欲しい旨を伝えた。帰省との兼ね合いもあり早めの回答を求めたが、回答が間に合わなかった場合には派遣の依頼をしても構わないかどうかの伺いもたてた。結局、回答は後日連絡となった。

誕生祝い

Y市障害者スポーツ文化センターの送迎バスでS駅に行き喫茶店でお茶とケーキを食べ、地下鉄でY駅に戻った。この日はDZさんの誕生日だったので、レストランでYさんがごちそうしてくれ、ワインで乾杯した。このような時もDZさんはいつもと変わらない服装で、特別着飾ることはしない。化粧もしない。DZさんは、もともとノーメイクで顔に異物をつける感じが嫌いだという。

22時、Yさんと別れバスで帰宅。帰宅後1時間ほどパソコンに向かい23時30分就寝。

2003年12月17日(水)

通院

8時30分、バスでY駅に出て、通訳・介助員のTさんと待ち合わせた。病院介助はTさんともう一人の通訳・介助員を隔月交代で指名依頼している。二人の通訳・介助員を交代で依頼するのは一人に限定して指名しているとその人の都合が悪くなった時に代わりがきかなくなると困るためである。

S線Y駅を經由してO線S駅からバスでK病院まで行った。神経内科を受診。神経内科の受診は月1回。この病院の眼科にも3ヶ月に1回通院している。

院内食堂で昼食をすませ、薬を受け取り15時家に着いた。

帰宅後、洗濯したりTVを見たり、パソコンをして過ごした。TVは毎週見ている連続ド